表1

『日本国語大辞典』の濁音を含む見出し語形	漢字欄	『廣袋』清濁 ▲＝濁〇＝清	連濁	用例語形	『廣袋』の用例文（漢数字は巻）
えぶ	厭舞	▲		えぶ	七「えぶの乱声とて三度ほこをふる」
おいしりぞく	老退	▲		おいしりぞく	五「致仕二字を、訓にはおいしりぞくとよむ。老退也」
おにじ	雄虹	▲		おにじ	一「虹はおにじ、霓はめにじと云ふことあれども、いき物にあらねば、実の雌雄も有べからず」
かたかど	片才	▲		かたかど	六「人のことをいふにかたかどあるものといふは何なる心そ。〈略〉二には、とり所あるもの、それをは、かたかどとも云ふ、一節ある義也」
かぶる	被	▲		かぶる	八「田をつくりて今日おそくうえたらんものは、伊福部神の禍をかぶるべしと云ける」
かゆがる	痒一	▲		かゆがり	四「へそはかゆがりて足にてかくに落る也」
くなどのかみ	岐の神	▲		岐（クナドノ）神	一「日本記には伊弉冊尊（いさなさのみこと）すて玉へる杖を岐（クナドノ）神と云ふと云へり。くなとの神とは道祖神也」（p52）
くぼ	凹	▲		くぼ	六「陰には三のよみあり。一にはほど、二にはほぞ、三にはくぼなり〈略〉くほと云ふは女根の異名なるべし」
げすし	下種	▲		げすしき	六「双六は下國のしわざにてかみつかたにはせぬことのやうにおもへるはゆへありや、これらを思ふにはさしも、げすしきゆへあるべしともおぼえず」
こしつづみ	腰鼓	▲		腰鼓（コシつづみ）	七「呉楽、云々、拍子には、ほそつづみを用ふ、ほそつづみとは腰鼓（コシつづみ）と云ふもの也、くれつづみとも云ふ」（p525）
さわやぐ	爽一	▲		さはやぐる	八「楊枝をは天竺には憚多家諦詫（さんたかしゃた）と云へり〈略〉あはせて歯木と云ふ。歯をさはやぐる木なれはなり」
つなぐ	繋	▲		つなぎ	八「とりて雉の尾にかけたるに、さじとびて伊福部の岳にあがりぬ。又そのへそをつなぎてゆくに、いかつちのふせる石屋にいたりて」
なめげ	無礼一	▲		なめげ	一〇「ひんなきよしを云ふになめげにと云ふ心如何 平の字をなめげにとよめり平懐と云ふも同事歟 一（ひと）きは思ひましたるけもなきは平民に准して無礼の心地なり」
ばけもの	化物	▲		ばけもの	一「鬼門と云ふは丑寅の方也。古き人の物語にもばけものなどの来る事を云ふにはイヌ斗の方より」
ひがよみ	僻読	▲		ひがよみ	一〇「伏は練（ねる）なり。薬をねるにこの字を用る事あり。されば丹（たん）ねるべしとよむなり。伏（ふく）すとはひがよみ也」
ひとまじろい	人交	▲		人まじろひ	五「人まじろひもせぬ、おなじさまのものなれば」
ぶようひ	［虫秀］	▲		ぶようひ	四「（ひをむし）〈略〉わらはへはぶようひとそ云ふ〈略〉あぶらむしと云ふあをきむしのをとなしくなりてはねのおひたるを、ふようひとなつけて、かしらにぬる」
ぶろくしき	無六識	▲		ぶろくしき	一一「ぶろくしきと云ふことばは心如何。眼耳鼻舌身意の六識の中に第六識は意識なり。性念なきものは意識かけたるが如し。第六識なきにおなしければ、無六識と云ふ歟」
ゆぶゆぶ		▲		ゆぶゆぶ	四「鹿のおちうのはひろひてとる。わかつのはゆぶゆぶとあるものにて、くすりにす」
いえどうじ	家童子	△		いゑどうし	五「いゑどうしと云ふは其の心何かん家童子歟。刀自（とじ）と云ふは宿老女の惣名也。〈略〉いゑどうしとは家刀自をいひあやまりたる也」
とどめく	轟一	△		とどめく	一一「いかづちのなりとどめくをり」
あいづち	相槌	〇	連濁	あひつち	八「鍛冶があひつちと云ふは、二人むかひてうつゆへ歟」
あおくび	青首	〇		おをくひ	四「あをくひと云ふかものくびのあをきに似たればかもとかけり」
あぶらむし	油虫	〇		あふらむし	四「はぎのえだなどにつくあふらむしと云ふあをきむしのをとなしくなりてはねのおひたるを、ふようひとなつけてかしらにぬる」
あまぎぬ	雨衣	〇	連濁	あまきぬ	七「雨衣とかきては、あまきぬとよむ。今の世に雨ふれは帷をかつゝか如くあめふる時きる物の名也又油衣と云」
いがいが		〇		いかいか	四「斑なる虎ありてこれを守護して乳をのませて毛のいかいかとをひたるなり」
うが	宇賀	〇		宇加	一「福の神を宇加と申す心如何〈略〉くちなわを今の世に宇加と云ふは宇加の神のの形に変して人に見え玉ふ心か」
うがのかみ	宇賀の神	〇		宇加の神	一「宇加の神福神にて、翁が家もほどなくたのしくなりにけるなるべし、保食神（うけもちのかみ）とこのかみと一つにかよひたまへるにもあらん」
うさもつ	墳	〇		うさもて	三「一、にはとりあはせを三月三日にするはいかなる心ぞ これを地にまつるに地うさもてり」
えだちょうし	枝調子	〇		えた調子	七「大食は平調の呂のこゑ、乞食をは一越調のえた調子とせり。共に別の調子には非ず」
おおぐれ	大一	〇	連濁	大くれ	五「大人と云ふはなに事の大なるぞ〈略〉心の大くれにして、こめかしからず、のさなるを云ひならはせる歟」
おおば	欸冬	〇	連濁？	をほは	三「鞭東（くゃとう）・冬の異名なり。訓のよみは、をほは」
かしらぐろ	頭黒	〇	連濁	頭黒（カシラクロ）	七「土の中より黒き物の頭さし出はるを、弓のはずにてほり出し給ひければ、男一人女一人そありける〈略〉其の子孫今に残れり。是を頭黒（カシラクロ）と云ふ」
かぶと	兜	〇		かふと	五「あまたをひとつにすへあつむるを大魁とは云ふ也。智分も心もたらざらんものはさやうの事あるべからず。衆のかふとを云べき也」
ぎょする	御	〇		御（キヲ）す	一〇「御はかならずかしつく詞歟。車を御（キヲ）すなと云ふ如何」
くじ	区児	〇		区児（クシ）	二「風土記に云、俗語にて栗を謂て区児（クシ）と為（す）」
くじり	鯨	〇		久慈理（クシリ）	六「常陸国に久慈理（くしり）の岳（をか）と云ふをかあり。其のをかのすがた鯨鯨にたるゆへにかく云へりと云々。俗語に謂鯨為久慈理（クシリ）と云へり」
くちがみのさけ	口噛酒	〇	連濁	クチカミノ酒	九「酒をつくるをばかむと云ふ事 男女一所にあつまりて米をかみて酒槽に吐き入れて〈略〉酒の香の出てくる時又あつまりて〈略〉これを飲む。名づけてクチカミノ酒と云ふと云々、風土記に見えたり」（p622）
くらじり	座尻	〇	連濁	下風（クラシリ）	二「幡鼠の長食首細目（みやけのをひとはそめ）がもとにつかはれてくらのうしろにおはせし事を日本記に云へるには室の外に躰て下風（クラシリ）に居るとよめり」
くるまざき	車裂	〇	連濁	くるまさき	六「よの人両車のつみといふ。くるまさき也。ゆひつけて、両方へやりのけてさくなり」
けらざい	螻蛄才	〇	連濁	けら才（サイ）	四「一碩鼠と云ふは何ぞ、碩鼠の五能とも云ふはけらに五の能あれともげにげにしき事にはあらざる故に、ちちと物を知てよくもなきをばけら才（サイ）と云ふ是也」
ごうかのきはえんずのき	合歓木は槐の木	〇		かをかの木はゑんすの木	二「かをかの木はゑんずの木と云ふことはさあり。まことに同木歟。〈略〉槐とねふとは同類なり」
ささりばち	螫蜂	〇	連濁	ささり蜂（ハチ）	一〇「さそりとはささり蜂（ハチ）と云ふものなり」
さんぶくろ	算袋	〇	連濁	算袋（サンフクロ）	九「魚袋をば博聞録には上代には章を以て之を為（つく）る。之を算袋（サンフクロ）と謂ふと云へり」
しこぶち		〇		しこふち	一〇「もののげすしきやうなるをしこふちと云ふは正字如何。此の事させる本説をきかずたた世俗のことば歟」
しらがふふき	白髪斑雑	〇		しらかふふき	六「白髪斑雑とかきて、しらかふふきとはよむなり」
しんぼく	臣僕	〇		臣僕（シンホク）	五「わひしけにやつれたる妾したるをは、しんぼくとしてと云ふは何なる義そ。しんぼくとは臣僕（シンホク）歟」
すづくる	巣造	〇	連濁	すつくり	三「かささぎと云ふはみの毛の頭にある鷺歟〈略〉冬至の日すつくりそめて春子をうむもの也」
すわぶる		〇		すはふれ	九「沙糖〈略〉この草のくきをわきりにきりて、すはふれはあまきしるあり」
たなごいのはこ	手拭の箱	〇		たなこひのはこ	八「一 巾箱はたなこひのはこ歟。巾箱はふみのはこ也。巾の字を常にはたなこひとよむ」
たぶろかす	誑	〇		たふろかす	一〇「たはかると云ふ事はたふろかす歟」
たわごと	戯事	〇	連濁	たわこと	一〇「諺言とかきてたわこととよむ実正もなく首尾あはぬことはを云ふなるべし」
ちいさご	小人	〇	連濁	ちゐさこ	一「ちゐさこの国と云ふ事は実にありや〈略〉東荒に少人国あり人の長（たけ）九寸」
ちんぶ	鎮舞	〇		鎮舞（チンフ）	七「新造の御堂御所などにて此の事あるをば鎮舞（チンフ）とも云ふ定案摩と云ふも鎮する心ある故に余の舞に先だちて始に必ず是を舞」
とうぼう	蜻蛉	〇		トウハウ	四「蜻蛉（せいれい かげろう）と云は大少のトウハウの惣名なり」（p304）
とびくさ		〇		とひくさ	三「さきくさをは〈略〉又是をとひくさと云ふ。あらたにおふるとひくさと云ふ。のはなと云ふ是也。さきくさをばとひくさと云ふゆへに、このとのはむへもとみけりともよめる歟」
とりかぶと	鳥兜	〇		とりかふと	七「千秋万歳の法師が頭にかつく物をとりかふとと云ふは、何なる義そ これ極たる俳案也 甲に鳥の頭の出たるをこそとりかふととは云べけれ貴徳綾切などのきるかぶとも也」
なりこつ		〇		なりこつ	六「下國の飼になりこつと云ふはことはたかにどどめく心歟。鳴動の義歟」
なんだち	汝達	〇	連濁	なむたち	三「なむたちがたたかひて敵をころすは犬の功也、これをもしふる譜何は人の功なり」
はだせ	肌背	〇		はたせ	四「一、黒駒と云ふは、〈略〉はたせにてとりあえすはせけるにこそ」
ひさぎ	瑟	〇		ひさつ	七「瑟を此国にはひさつと云ける常陸国記云採大谷村之大榛本造鼓末造瑟（俗云比佐頭）と云へり」
ひとりゅうど	独人	〇	連濁	ひとりうと	五「ひとりうとと云ふはしたしきものもなき人か 常にははくくみ扶持するものなき孤露独身の義也」
ふかぶた	深蓋	〇	連濁	ふかふた	八「うちををひのふかふたの未漆のひつの」
ふくびき	福引	〇	連濁	ふくひき	九「年始には人ごと餅を貴翫する何の心かある〈略〉二人むかひて餅をひきわるをば福引（ヒキ）と云ならはせるも、ゆへなきに非るか」
ふくふくしい	福福	〇	連濁	ふくふくし	一〇「得々と云ふはふくふくしと同事歟」
ふとうじ		〇		ふとうし	八「此の虫をとらへて、ふとうしと云ふものをおなしものに入れあはせたれは蝎ふとうしをさすに」
へがれる	剥	〇		へかる	一〇「耗の字をばへかるとよむ、へつれるもへかるるも心は、おなしていのことばなり」
ほうこうだて	奉公立	〇	連濁	奉公たて	八「成親かことにあひけるには、それを奉公たてにして、とかをゆりんと申しけるとかや」
ほぞ	臍	〇		ほそ	六「へそをほそと云へども陰をもほそと云ふ」
ほそつづみ	細鼓	〇		ほそつつみ	七「拍子にはほそつつみを用ふ、ほそつつみとは腰鼓と云ふもの也、くれつつみとも云ふ」
ほどごる		〇		ほところ	一〇「つねには迸の字をほところとよむ。敢する心なり〈略〉 これもひろこる義歟。濯の字をもほところとよむ」
ましなう	祝	〇		ましなふ	七「吐瀉の大明神は●歯をましなふに必ずいやし給ふとかや」
めにじ	雌虹	〇		めにし	一「虹と云ふは何れの所〈略〉雲のうすき所に虹もうすくみゆ。又、影うつるひて別にうすき虹の見ゆることもあり。是れ等をわきて、めにしおにしと云ふ歟」
もどきのて	擬きの手	〇		もときのて	一〇「田楽のもときのてと云ふはたたみたるはかりにはあらず、をとらしとふるまふよしなり」
ようず	堂	〇		やうす	一〇「物をみかくをやうすると云ふは其の義如何〈略〉やう見させる屈曲なし堂只をもてみかくなり」
よくぼる	欲欲	〇	連濁	よくほる	一〇「ものを欲ほると云ふは堀求（ほりもとむる）心歟。よくほると云ふは重説なり。欲の字すなはちほる也」
りんごう	林檎	〇		りむこう	二「林檎をば字の如はよまずして、りむこうと云ことある如何。順が和名には林檎とかきてりうこうとよめり」
あんぺい	安平	—		安平	一〇「人を安平に云ふ時、をれらがと云ふは、われらがと云ふ心歟。心はわれとをれと通ずる歟とおぼゆ。〈略〉さがりさまのものを汝がと云ふ、同じ事也」
えんぶ	厭舞	—		厭舞	七「桙ふるをえん舞と云ふは正字如何。其の心おぼつかなし。厭舞とかく也。厭の字をばましなうとよむ」
おなが	尾長	—		尾長	三「尾長鳥と云ふは古云べき鳥のある歌〈略〉但、常陸国記に云。別に鳥有り。尾長と名、亦酒鳥と号す。其の状も、頂は黒く、尾は長く、色は青鷺に似」
おながどり	尾長鳥	—		尾長鳥	三「尾長鳥と云ふは古云べき鳥のある歌〈略〉但常陸国記云別有鳥名尾長亦亦号酒鳥其状頂黒尾長色似青鷺取雀而略似子非準栖山野亦住里村と云へり」
がいにまかす	我意に任す	—		雅意にまかす	——「雅意にまかすとは我が心といふ義歟、雅の字如何〈略〉雅意にまかすとは、もとの心と云ふ歟、わがもと思ひはじめたるを、ひが事なれどもおこなはんとするは、雅意にまかする義歟」
かじょ	歌女	—		歌女	四「みみずを歌女云ひてうたうたふ事あり。但しみみずのうたと云ふは多分けらのなくことは一定、みみずの証いまだみず、なけばこそは歌女の名はあるらめと思ふばかり也」
きぐさ	黄草	—		黄草	三「一には本朝式に黄草をかりやすと云へり」
ぎよみ	義読	—		義読（ヨミ）	一「日本記には五世とかきて、いつつきとよめり、是は義読（ヨミ）歟」
けんじん	賢人	—		賢人	九「にこれるを賢人と云ふことは、聖人よりは今少しひきをとりたれとも、なをこれもいみじき心歟」
ごうこ	合期	—		合期	一〇「たやすきとは合期の義、かやすきは軽き心也。かろきにつきて合期の心もかよふへきにや」
さかどり	酒鳥	—		酒鳥	三「常陸国記に云はく、別に鳥あり。尾長と名づけ、亦酒鳥と号す。其の状、頂（うなじ）は黒く、尾は長く、色は青鷺に似たり。雀を取りて、略（ほぼ）の子に似たり。隼に非ず。山野に栖み、亦里村に住むと云へり」
しじん	四神	—		四神	一「地相に四神具足と云ふは四神の躰なにもの不」
じゅりょく	呪力	—		咒力	五「まほろしとは〈略〉頌文をしかけてましなふに其の咒力によりて不思議を現する也」
じょさい	如才	—		如在	一「人の懈怠なるをば如在なりと、わろき事に思へり。〈略〉人の如在にてわろきと云ふは形の如くするまねをしてあるか、なきかの分なれば如在とかきて、をろかなる心をきらふ」
しょぶつ	諸物	—		諸物	八「子の字はこれにかぎらず諸物に多く通ずる字也、櫑子、瓶子、銚子〈略〉等のたぐひおほし」
しらぎがらす	新羅烏	—		新羅烏	三「対馬烏と云ふ烏あり〈略〉壱岐嶋に烏あり。これをば新羅烏と云ふ。麦のたねまく時群がり飛びて、麦をくらふと云々。それも、ちひさうして羽白し。必しも烏の号のあるべしともおぼえず
しらぎまつ	新羅松	—		新羅松	二「新羅松と云ふは、いかなる松そ。これは五葉の異名也。この松はもと新羅国の松なるへし」
しんなきかめはこうをやぶる	信なき亀は甲を破る	—		信なき亀は甲わる	九「信なき亀は甲わると云ふ如何」
じんばそう	神馬藻	—		神馬草	三「神馬草と云物をなのりそと云心如何」
すいりんざい	水輪際	—		水輪際	七「池水沢水などには非ず水輪際までもとよませ給へるなるべし」
せいじん	聖人	—		聖人	九「さけを聖人と云ふ名あり云ふ、如何。すめるさけの名なり。酒の徳をほめて聖人と云ふにや」
だ	駄	—		駄	四「牝馬を駄と申すは、駄をやがてめむまとよむ歟」
てんぐせい	天狗星	—		天狗星	一「星の中に天狗星と云ふあり、天狗流星とも名く、大流星と名て光りものの如にして」
てんぐりゅうせい	天狗流星	—		天狗流星	一「星の中に天狗星と云ふあり、天狗流星とも名く」
どうそじん	道祖神	—		道祖神	一「昔黄帝の子とをく遊ぶことを好みて路のほとりに死に玉ひけるが今道祖神となり玉ふ。〈略〉路ゆき人を護る神也」
どうふく	道服	—		道服	八「雨ふらぬ時も乗馬する時は上にうちきて、おひもせぬものあり。其をば道服と云ふとかや」
なつのこおりはせんじなければこおらず	夏の氷は宣旨なければ氷らず	—		夏の氷（ヒ）は宣旨なければこほらず	二「夏の氷（ヒ）は宣旨なければこほらず と云ふ事如何。王法いみじくばさこそは有るべけれ」
ひゃくにじゅうねん	百二十年	—		百二十年	六「百二十年の寿命など祝言にもいふは」
ふくうけんじゃく	不空羂索	—		不空羂索	八「不空羂索と申すは、人の心は春の馬にたり〈略〉このあれたる心をしづめて調伏し、利益したまふなるべし」
ぶんげい	文芸	—		文芸	五「博士のわかさかり学問する時文芸をこころみて謬（あやまり）なければ是を文章生に補す」
まちぎみ	町君	—		町君	五「町君と云ふは下輩の姪女也」
まんだら	曼荼羅	—		曼荼羅	一「北斗の曼荼羅に貪狼星を図するには、四方に四神をかけり」
みずかさ	水嵩	—		水かさ	一〇「水かさをちて後、本所にかへらんと思へども」
みのげ	蓑毛	—		みの毛	三「かささきと云ふはみの毛の頭にある鷺歟」
もうじゅう	猛獣	—		猛獣	四「一猛獣とは、虎、をほかみ、師子等の名歟。常にはさやうに思ひ習はせり。但し帝範の注に猛獣の二字を釈するに、西蜀より之を獣。大さ、犬の如しと云へり。これを思ふに別のけたもの歟」
らんぶ	懶婦	—		懶婦	四「懶婦と云ふはきりきりすの異名也」
りゅうぞう	龍象	—		龍象	五「僧を龍象と云ふ其の心如何〈略〉よき僧を日月、龍象にたとへたり。日月は光をとり、龍象はちから大していさめるによそへたり」